

甲斐国国分寺周辺聚落址の調査(予報)

—末木両木神社付近の場合—

1972・3

山梨県教育委員会

目 次

1はじめに	1
2調査にいたる経過および環境	4
3遺構	6
4遺物	13
5まとめ	18

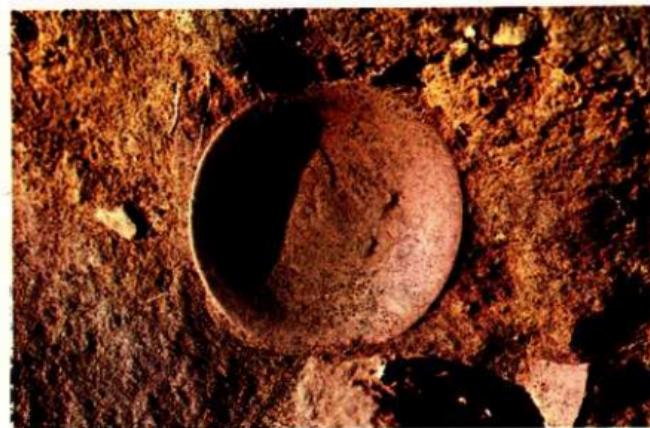
図 版



甲斐国分寺（中央寄り）及び甲斐国分尼寺（左下方）



豊穴出土の綠釉陶器



豊穴出土の土師器及び鐵滓

1 はじめに

奈良～平安期にかける聚落址の研究は、文献史料の面と考古学的調査による場合があり、特に山梨県では両者両面の研究のたちおくれが目立っている中で、最近の他県の成果については長野県福島遺跡^①、東京都中田遺跡など見るべきものが多い。また国分寺周辺の堅穴住居址の調査は昭和24年故中野勇氏らによりおこなわれ、その成果について報告されているところである。

昨年秋日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会で群馬県が試みた調査を「僧、尼中間地域の調査」僧尼中間地域調査の意義」松島栄治氏外上野国寺遺跡を守る会の手によって略報されているなど国分僧、尼寺の寺域内に比して勝るとも劣らない学術資料として注目をあつめてきている。

ここに報告する東八代郡一宮町字末木の両木神社付近については、すでに昭和44年度国費補助をともなう埋蔵文化財緊急分布調査の山梨市～三ヶ町間大規模農道路予定地調査時において「末木遺跡」としてその重要性を指摘し、さらには昭和45年度の同様緊急分布調査の勝沼バイパス予定路線においても、公益性を有する開発施策の中にあって当然のこととして点から「面」へ保護対策を考えねばならないことを強調し、面でとらえる環境整備の具体案が必要である旨を付言しておいたところであった。何故ならば、当該一宮町は、更に中央高速道路西宮線が勝沼町方面より御坂町、石和町方面に続断し都合併せて3本の新設道路予定線が、国史跡地の寸断線を通過するからである。ただ幸いなことに今回の緊急調査にあっては（第4工区）既設農道を利用し、巾員を若干メートル拡幅するということであったが担当者自身も、寺域周辺の実体をすべて明らかにすることは至難なことであるし、むしろ、たといソーメン状のトレンチを設定することにより凡そ遺跡の範囲や、それらの在り方を可及的速やかに調査し歴史的環境の中での保存対策を前向きに打出す一方法ともなればと考え、そのことが焦眉の急務であることを認識しての参加であった。

そして若しこのことが許されるものとしたならば、本町の対岸金川扇状地形上の一角、石和町々常住宅付近（熊野神社域近接）から出土を見ている、四弁文花の陶器片や、黒釉系陶器片などからそれらとともに土器器、や陶器、の縄年の研究も可能となろうとする研究内容をもって調査をすることとしたのである。災のところこの種陶器片についての考古学的発掘調査遺物は本県の場合過去には全くなく縁軸陶器ですら本格的にその分布や実体などふれる機会は存しなかったからでもあり、僅かに戦前仁科義男氏が調査した南部留郡河口湖町船津上ノ段の窯跡付近から10数年前宅地造成の際の、川上遺物の中に縁軸陶器片が認められるなどから、灰釉陶器をも含めて、大場磐雄博士の「官道若しくはそれに準ずる道路にそって分布する傾向」にあてはまるかどうかの期待を発掘調査によって確かめたいと考えてもみたのである。そのことは行政発掘の頻発によって研究者自身、追跡の道を無意識のうちに歩み、その主体性を考える余裕すらない例を残している現状にかんがみ少しでも本来のもつ學問的必然性に近づけたいと考えたからでもあった。（山本寿々雄）



第 1 図

手前を横に走る農道が広幅される大型農道で、これに直交を予定される勝沼バイパスがあり、そして中央高速自動車道に連り間発拠点となろうとしている。左端は両木神社から甲斐国分尼寺付近であり、礎石の一部が見える。



第 2 図

角田文鼎著「国分寺の研究」所載当時の地形図。尼寺址東方約 0.3km に末木両木神社がある。

2 調査にいたる経過および環境

さて前にも述べているように昭和44年度国費補助事業による緊急分布調査は「山梨市～豊富村間農免道路外」正確にいと、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業農免道路、山梨市、豊富村間といふことになるこの種の大型農道建設事業は全国に先きがけてということであり、区間22.1キロメートルの内16.2キロメートルが1部既設道路を含めての包含地調査の対象となり山員は6.5メートルで、応路線予定地内の100メートル山を緊急に分調査するという内容のもので、昭和45年1月20日付山梨県教育長名による調査員会議が招集されたのである。そしてその結果については、埋蔵文化財緊急分布調査報告書昭和44年度によって明らかにされ、道路建設を限らず、文化財ができる限り保護してゆく方針をとらなければならないとされるにいたつたのであるが、この件に関して具体的に三者協議の場を作ることは（企業者側、保護主管者側、研究者側）みられないままに昭和46年11月3日三者が工区間の現状観察ということになりニクソン新経済政策によって、当該の第4工区間外を昭和47年3月20日までに完了、緊急の事前調査は出来得るならば11月中にして欲しい旨であった。

このような説明をたどる中には、さきに示しておいたように「三角図表」によって、筆者なりに仮に保存率というものを定めて、これが企業者側にも、保護の主管者側にも、そして研究者自身にもメルクマールとして活用し数量化することによりさらに前向きに理解を深めたいとしたのであるが、まだ保護主管者側と企業者側との間には緊急調査に対する覚書の交換というもののすらわが山梨県では交わされていない現実を、とびこえて破壊を正当化するためのケースバイケースで処理されてはならなかったための一方法ともしたのであった。

したがって点から面への保護対策を考える手段としてまえがきにも述べているような考え方の下に自身調査体制をなし、甲斐国分尼寺周辺の一帯にトレンチ設定と相成ったわけである。

一、「宮町の国分寺跡近在（國分、末木）」は、金川、大石、御手洗川の間にあり河川氾濫地の上に成立している平坦地であり特に金川の場合、航空機よりの観察では明瞭に八幡橋付近より西南方面に広く長く河川氾濫地が及んでいることがわかる（御坂町、石和町）そして主として後期古墳と、土墳式中期以降の落塚が予想されているのに対し一宮町、国分～塩田にかけては編文中期あるいは先土器文化の包含層が存在しその上部に土器文化の層がみられるのも特徴の一つかも知れない。特に國分寺南大門近くからは編文中期後半の遺跡の一部が判明している。末木両木神社近在の包含地にはこのような編文期あるいはそれ以前の文化期のものは見当らず、表面採集その他の結果からも国分期等同時期の遺構のみである点が注目される。

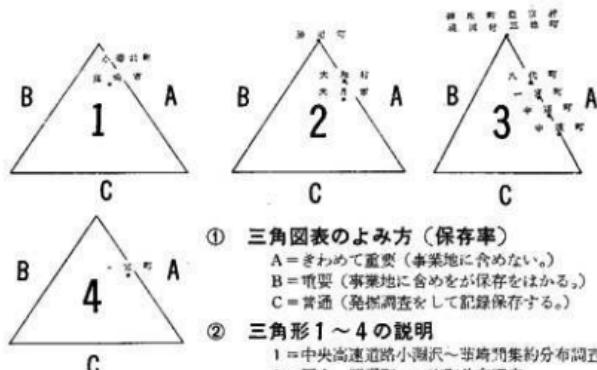
両木神社は國分尼寺の東方約0.3kmのところにある。この神社前の農道が拡幅されて大型農免道路となるのであるが、更にこの付近で勝沼バイパス道路が直交を予定されている。またこれらの地域は、例えば平安中期の和名抄に示されている国府の位置の確定はともかく「国府は八代部に在り。行程上二十九日下十三日」にも見える地域の近在でもあり、大石川べりには式内社後間神社など、甲斐

園律令の古代の中心地とも云えよう。そして標高360~200メートルの広い扇状地は果樹王國の名を欲しいままに農業の選択的規模拡大化が進んでいるのが現状である。

この地域に新総合開発計画がすすみ、様相は一変しようとする今日歴史的環境の保護は県施策の急務であるといわねばなるまい。そして現在もなお中央高速自動車道が、航空写真で見るように、第4回の手前の八幡橋、と次の四ツ橋の中間地域に通過する構想がすすみ、一宮インターの要素として、次のようにまとめているのも重視しなければならないであろう。即ち

⑩ 一宮インターの要素として

①国道137号線に結んで郡内地方を経て、静岡県東名高速に結ぶに有利な地点である。②JR東海バスと結び東山梨地方と連絡するに適している。③国中東部に対する交通が便利である。④一宮町及び周辺町村の地域開発が有望の箇所である。⑤周辺果樹地帯の流通機構改善のために有効である。をあげている。（山本寿々雄・谷口一夫）



第3図

保存率を見るための三角図表

参考文献

- | | | | |
|---------------|-----------------------------------|---------------|------|
| ① 大川 清 | 伊那福島遺跡 | 長野県考古学会 | 1968 |
| ② 八王子 中田遺跡調査会 | 中田遺跡 I~III | 同 調査会 | 1968 |
| ③ 松島栄治 | 群馬県の古分寺遺跡について | 日本考古学協会理事会 | 1971 |
| ④ 山本寿々雄 | 「一宮町」埋蔵文化財緊急分布調査報告書 S44 | 山梨県教育委員会 | 1971 |
| ⑤ 同 | 「一宮町」勝沼バイパス S45 | 同 | 1972 |
| ⑥ 同 | 行政発表による学園の危機を三角形表よりみる | 甲斐考古 9の1 | 1971 |
| ⑦ 日本道路公团 | 日本道路公团の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財保護の取扱について | 同 公團 | 1967 |
| ⑧ 山本寿々雄 | 航空撮影による山梨の古墳 II | 富士山立公園博物館研究報告 | 1961 |
| ⑨ 森本光一 | 山梨県東八代郡一宮町出土の尖頭器及び有舌尖頭器について | 甲斐考古 6の2 | 196 |
| ⑩ 山梨県 | 中央自動車道南廻り線（計画発表） | | 1970 |



第 4 図

金川八幡橋上空よりみる（大型農道通過地）前方に四つ橋をのぞむ。

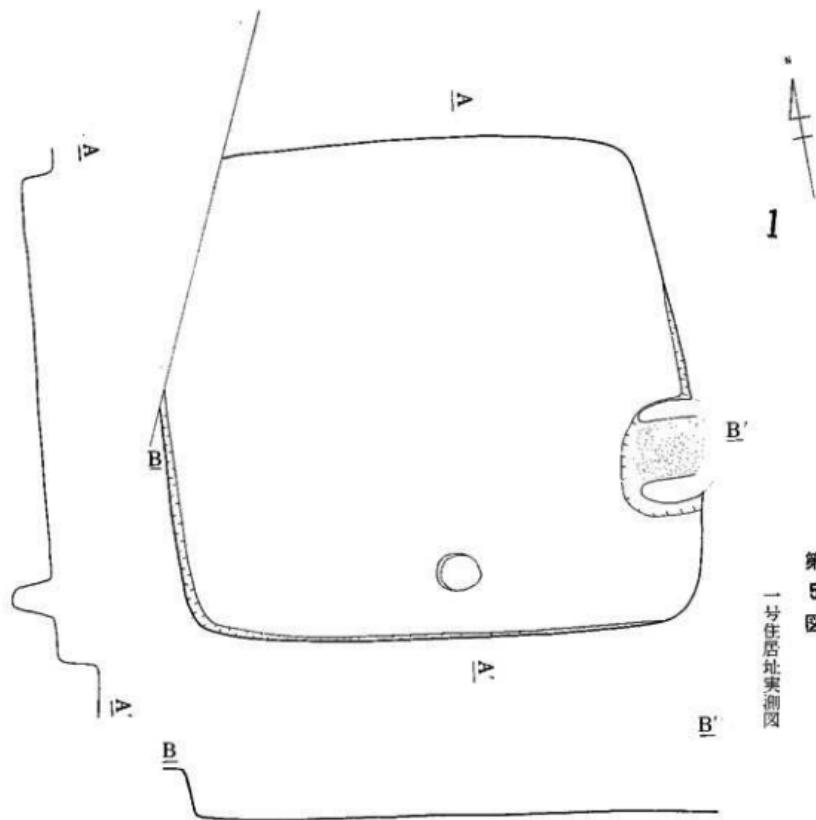
この間を中央高速自動車道が一宮インターチェンジを設けて通過し開発の拠点となる。

3 遺 構

聚落を構成する遺構としては、堅穴住居址、柱穴址、炉址あるいは井戸址など全国的に多くのものが報告されている。古くは昭和22年から27年にかけて大場磐雄博士等外調査会の手による長野県東築摩郡宗賀村の平出遺跡が著名であり（纏文～土師）^①本県山梨市日下部中学校々庭の聚落址もその1つである。地域的に近接地にあるこの一宮町末木両木神社周辺も、どのような聚落構成を示すのかは、すでにおこなっている緊急分布調査の際も大きな柱でもあった。表面採集などから考えてみても同一時期（国分末期）の土師器片や陶器片のみ、散々と部分的に示す状況から考え併せ一定地域に集中化しているよりは、むしろ散在しているのではあるまいかなどの予察はされているところであり、果樹等の樹木の植え込み作業中明らかとなっている包含層の場合をみても、全く遺物包含層のないところと、部分的にしろ確なところなどの観察はその手がかりとなっていた。

第 5 図

一号住居址実測図



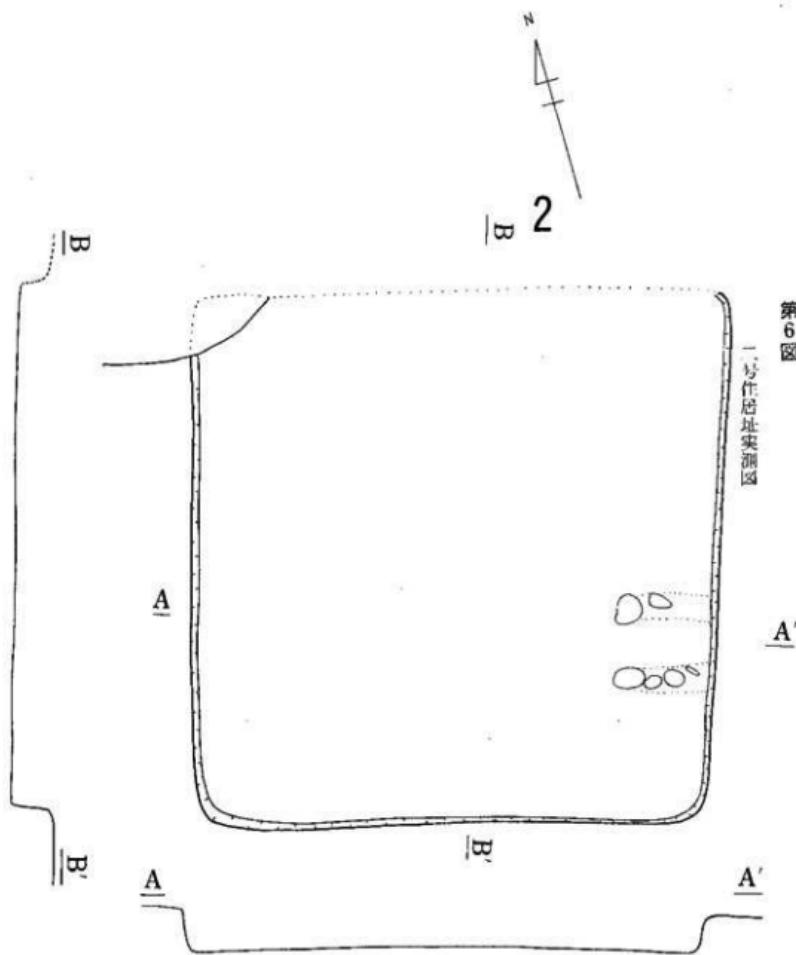
今回の発掘調査では、若干の差違新旧の別はあっても時系列的に考えられる竪穴住居はあわせて五号で、その流れの間に展開されたことをうかがい知ることが出来ようかと思う。以下1号～5号までについてその特徴をあげて理解をしてみようと思う。

第 1 号住居址

本住居址のプランは東西3.5m、南北3.8mの隅丸方形を呈するようであり、東壁中央よりやや南側にカマドを設営する竪穴住居址である。壁高は東約30cm、西約38cm、南約33cm、北約13cmを計り、いずれの側壁も直立せずに外傾している。北壁が他に比べ低いのは、本遺跡が桃烟で非常に深く耕作している事実より、壁の上面が削平されたものと思われる。床面は、砾を含む地山そのものであるが遺存状態は良好で、全面に因く、ほほ平らである。床面中央南東に直径30cm、深さ33cmを計るピットがある、検出されたが他の柱穴は認める事はできなかった。カマドは東壁中央より南側に設営されて、長径80cm、短径60cm、高さ30cmの規模をもち、薪土造りであった。煙道の料無は、発掘区域外の為確認出来なかった。

第6図

1号住居址実測図

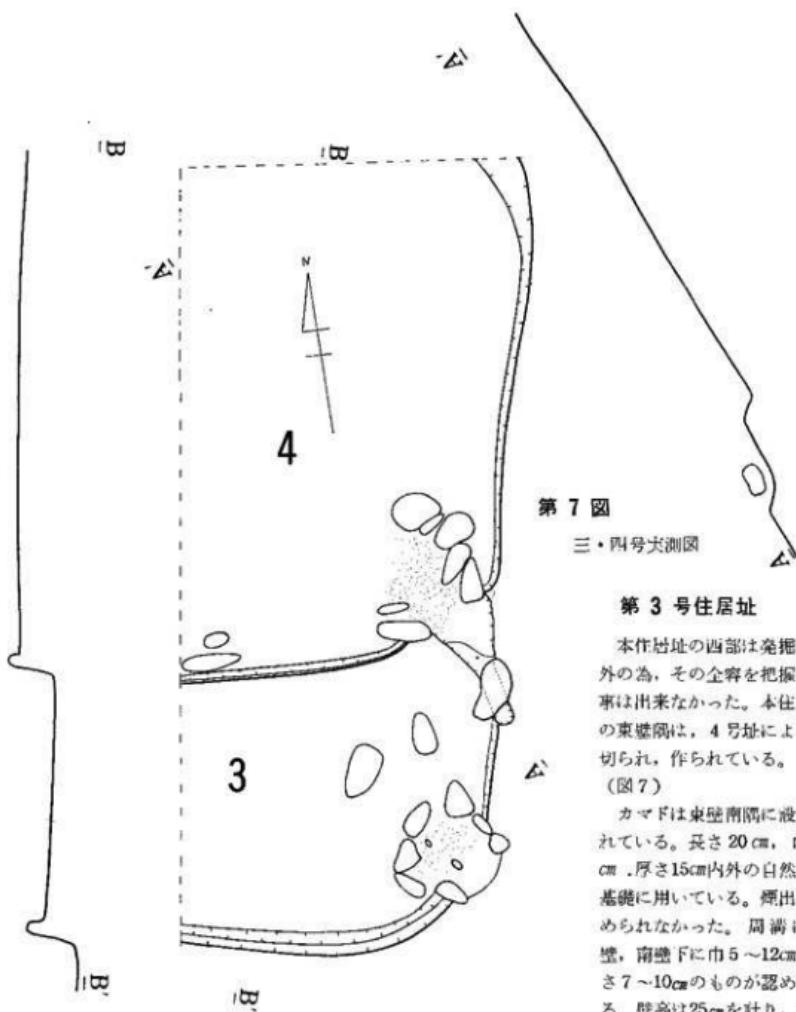


第2号住居址

本住居址は、3号址により切られているのが認められる。一辺が約3.5mの方形平頂を呈する。カマドは、東壁中央より南側に設営される竪穴住居である。

壁高は東約23cm、西約27cm、南約26cmを計り、いずれの壁もころもく外傾している。床は、1分と同様地山そのものであり、床面全体が固く、遺存状態良好で平らである。

カマドはいわゆる石造りで、東壁中央より南側に設営されている。長径60cm、短径55cm、高さ20cmの規模をもち、基礎には長さ10~20cm、巾10cm、厚さ10cm内外の自然石を用い、その全面を粘土で覆ったものと考えられる。煙出しは認められない。



第7図
三・四号穴測図

第3号住居址

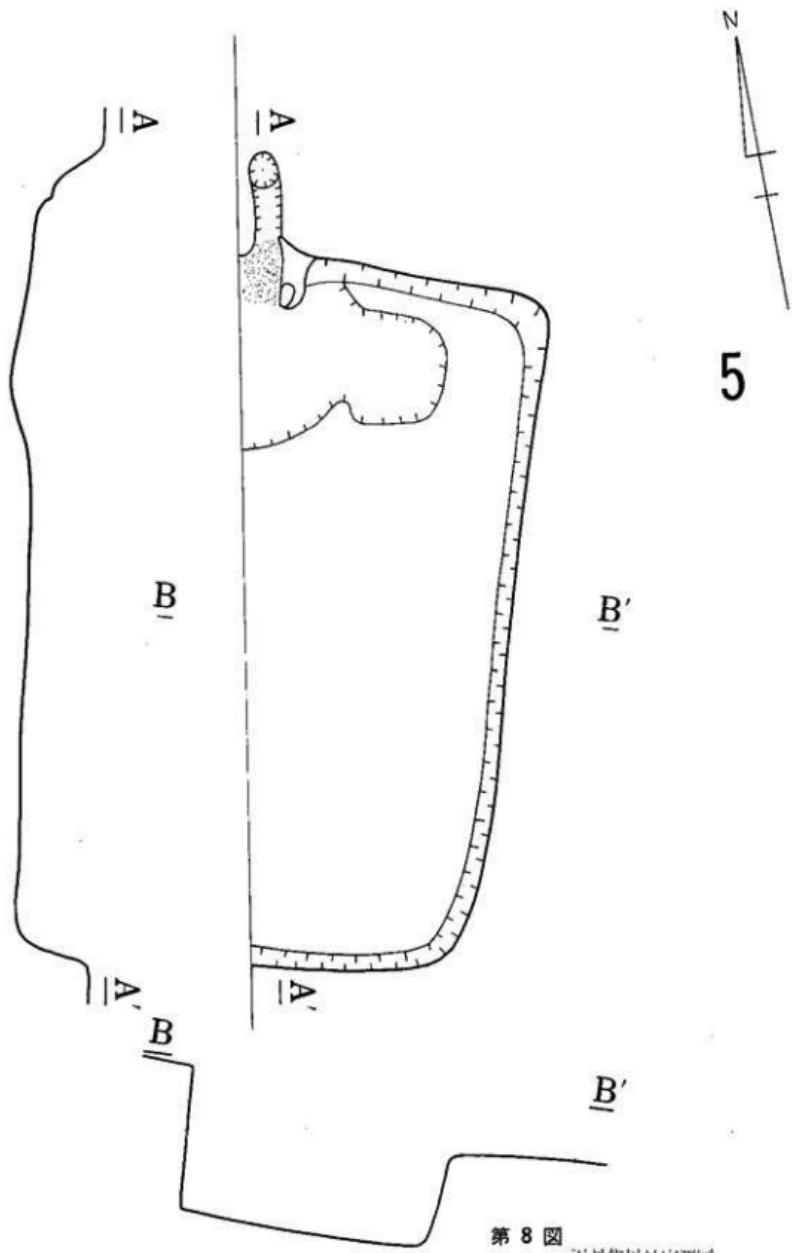
本作居址の西部は毫掘区域外の為、その全容を把握する事は出来なかった。本住居址の東壁隅は、4号址によって切られ、作られている。

(図7)

カマドは東壁南隅に設営されている。長さ20cm、巾10cm、厚さ15cm内外の自然石を基礎に用いている。煙出は認められなかった。周溝は東壁、南壁下に巾5~12cm、深さ7~10cmのものが認められる。壁高は25cmを計り、やはり外傾する。床面は北部は4号に切られているが、残存部は固く平らであった。

第4号住居址

本住居址の南側壁は、3号址を切って造られている。床面は、やはり縁を含む地山そのものであるが遺存状態は良好で、全面が固い。柱穴らしき穴は全く認める事が出来ない。周溝は巾10cm深さ5cmで南側壁下に開いているのが認められる。カマドは東壁南隅に設営される。石組造りで、基礎には巾6~20cm、長さ20~35cm、厚さ10~28cmの自然石を並列にならべたもので、その規模は高さ約30cm巾80cm、長さ85cm、を計る。煙道は、南方に向て巾10cm長さ約30cmで、煙出口の天井には巾20cm、長さ40cmの自然石の平石を用いて煙道を覆っている。



第 8 図
五号住居址(火葬場)

第5号住居址

本住居址、西側は、道路上の為、プランの全容を確認できなかったが、方形を呈するものと推測される。壁高は北約32cm、南約30cm、東約43cmを計り、直立せずに外傾する。床面は地山そのもので、遺存もよく平らである。カマドは、巾0.9m、長さ1m、深さ5~7cmの深込を呈しているのみで、燃焼部と考えられる部分に焼土が認められた。石組、粘土で構築されたカマドが、道路整備の際に欠損されたものと考えられる。煙道は、長さ40cm、直径10cmのトンネルが北に伸びる。柱穴らしき穴は確認できなかった。

本遺跡の遺構についての概要を述べてきたが、これらより窺うことの出来る点について若干の考察を試みてみることにする。

竪穴式住居址は、平面プランの状態、カマドの構造的特徴などによって次の如くに分類する事が出来る。

A類 平面プラン、隅丸方形を呈し、カマドは、粘土造りで、柱穴が認められないもの。（1号址）

B類 平面プラン、方形を呈し、カマドは石組み造りで、煙道を斜しないもの。（2号址）

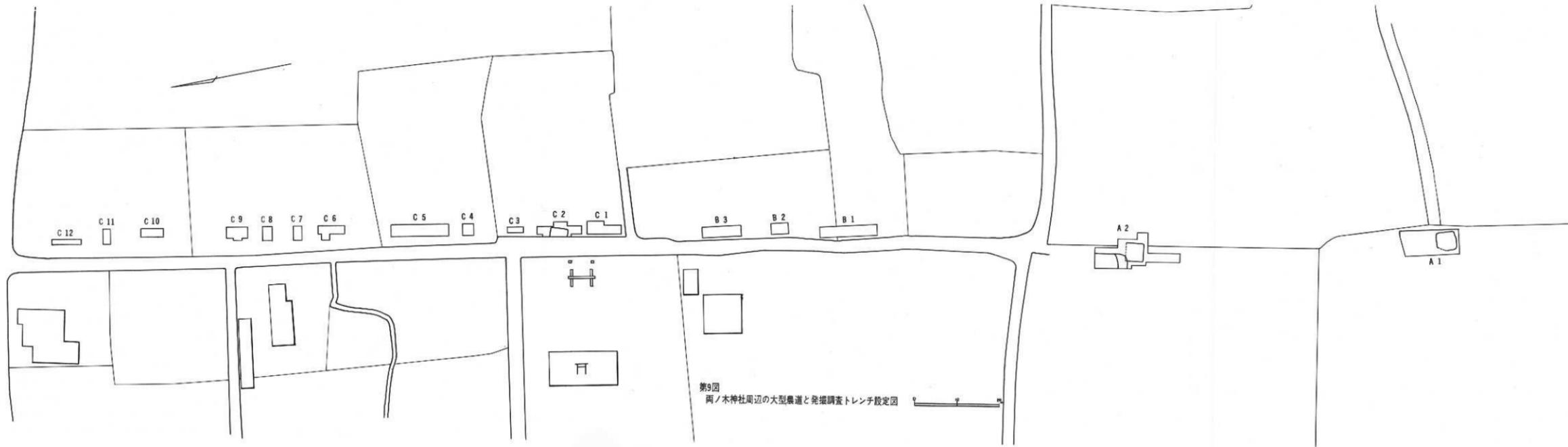
C類 平面プラン、方形を呈するもので周溝が開くもの。カマドは石組造りのものを斜するもの。

煙道がはっきり認められるものとそうでないものがある（3・4号址）

A、B、C類に共通するものは

- (一) 柱穴を有しない事
- (二) 壁は直立せずに外傾する事
- (三) 平面プランが方形を呈する事などについてである。

（小林広和）



第9図
両ノ木神社周辺の大型梶道と発掘調査トレンチ設定図

4 遺 物

本遺跡の出土遺物は、土師器、須恵器、縁釉陶器、灰釉陶器、土製品、刀子、刀装具、不明鉄製品、鐵滓、砥であり、その殆んどが1号から5号の住居址内で発見されており、各トシナ内よりは細かく割れた遺物が多く器形が復元出来るものは少い。

ここでは1号から5号住居址出土遺物の観察を中心に記述してみたい。とくに、本住居址出土遺物は一括資料として把握できるため、その資料的価値は高く、編年研究が端緒についたばかりの本県に於いて陶器編年と共にその指針となるようなものである。

1 第1号住居址内出土遺物

本住居址よりの出土遺物は、岡上復元可能な土師器17点（墨書きを含む）、須恵器14点、縁釉陶器2点、灰釉陶器2点の他に土製品、刀子、刀装具及び国分寺瓦が見られる。

(1) 土 師 器

土師器の器形は杯・蓋・皿・甕・釜形土器及び小形土器で、この中の杯については形状、整形法から5類に細別が可能である。

杯1類（第10図1・2）口唇部が僅かに外反し、口縁部より内側しながら底部に至るものである。底部は時計と逆回りに窓削りが見られ、底は糸切後に窓調整によって仕上げられたもので、一部に糸切痕が残っている。1の内面には放射状、2の内面には花弁状の窓磨きがそれぞれ見られる。胎土は精々されたもので、器面は滑らかであり、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

杯2類（3・4）口唇部が1類と比べて大きく肥厚、外反し、口縁部より内側しながら底部に至るものである。底部は1類同様な窓削りが見られ、底は窓調整で仕上げられている。整形は1類に比べ難であり、器壁も薄く脆さを感じる。胎土、焼成は普通で、色調は3が黒褐色、4が褐色を呈する。

杯3類（5・6）口唇部が内反り気味で、口縁部から略直線状に底部に至るものである。底部は台をもっているが、それほど顯著ではない。底は糸切底である。6には内外面にタール状の炭化物が付着している。胎土、焼成は普通で、色調は5が褐色、6が明褐色を呈する。

杯4類（7）口唇部が僅かに内反し、口縁部よりは緩やかに内側しながら底部に至るもので、底は窓削り調整で仕上げられている。整形は入念に行なわれ、胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

杯5類（8）口唇部が内反り気味で、口縁部は緩やかに、底部近くで急に内側したのに高台の付いたものである。側線は縦轍整形による起体が顯著である。内外面に横位と花弁状の窓磨きが見られる。整形は入念に行なわれ、胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

蓋（9・10）共に形態を把握するまでには至らないが、9の口縁部は鳥嘴状を呈し、内面には花弁状の窓磨きが見られる。整形は入念に行なわれ、胎土、焼成とともに良好で、色調は褐色を呈する。

皿（11～13）口唇部が杯2類より一層外反した器高の低いものである。11、12の側線は縦轍整形による起伏が見られる。3個とも底部に杯1・2類同様な窓削りが見られ、底は窓調整が行なわれている。11の外面上には墨書きが見られるが判読は不可能である。胎土は普通であるが、器壁が薄く脆さを感じる。焼成は普通で、色調は11が褐色、12、13が黒褐色を呈する。

甕（14・15）共に口縁部が外反し、それ以下では緩やかに内側して底部に至るものと考えられる。最大径は共に口縁部にあり、14は14.4cm、15は26.4cmを計る。14は外面に縦位の梢毛目痕が見ら

れずにすぎず、15では口縁部内側に横位、胎部外面に縱位、同内面に斜位の範疇痕が見られる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。

(5) (16) 外反する口縁部に略水平な跡が取付けられたものだが、此以下は欠損している。内外面に刷毛目痕が見られ、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

小形土器(17・18) 確かに圓形による小形の土器であり、共に刷毛目痕が見られる他、18には胎部中央に一条の沈線が回っている。胎土、焼成とも良好で、色調は17が黒褐色、18が赤褐色を呈する。

(2) 須 惠 器

須恵器の器形は杯、蓋、壺形土器で、杯は更に4類に細別され、胎土、焼成は共に良好で、色調は灰色を呈する。

杯1類(19~20) 口唇部が僅かに外反し、緩やかに外反する口縁部を経て高台に至るものである。

杯2類(21) 口縁部が1類より更に直線的に外方に開くものである。

杯3類(22) 側縁が前二者よりも直線に近いものである。

杯4類 圖には示していないが、底が高台を付けたものではなく、系切底のものをいう。

蓋(23~26) 23は遍平な把みであり、24~26の口縁部は島重状を呈している。

壺(27・28) 口縁部のみであるが内外面に暗緑色の自然釉がかかる。

(3) 灰 軸 陶 器

高台付碗(29・30) 29は色調が胎土に鉄分が多く含まれていたために黄褐色を呈し、僅かに縁釉が見られるにすぎない。30も高台付碗の高台を考えられるものであるが、これは両面に若草色の縁釉が塗布されている。

(4) 灰 軸 陶 器

高台付碗(31・32) 31は口唇部がやや外反するもので、内外面に白と灰色の灰釉が塗布されている。32は灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布されている。

(5) 土製品(35) 布目平瓦の破片を用いてその四周を磨いたものである。

(6) 刀子(33) 鉄製の刀子で腐蝕が著しい。

(7) 刀装具(34) 青銅製のさやどめ金具である。

(8) 墨書き土器 墨書きは11の皿に見られる他、2片が検出されたが、判読可能なものは杯底部破片に書かれた「毛」だけであった。

(9) 瓦 平瓦、丸瓦の破片がかなり多く出土しているが、他種のものは認められない。

1号住居址の特徴は、縁釉陶器と瓦及び墨書き土器の存在と、他の住居址に比べて須恵器の出土量が多いことといえる。

2 第2号住居址内出土遺物

本住居址よりの出土遺物は図上復元可能な土師器7点、須恵器1点、灰釉2点の他に砥と鉄滓が見られる。

(1) 土 磬 器

土師器の器形は杯、皿、壺、釜であるが、壺は破片のため圖に示してない。杯は更に3類に細別できる。

杯1類(第11図1・2) 口唇部が大きく外反し、口縁部より内弯して底部に至るものである。底部には時計と逆回りに窓削りが行なわれており、底は窓調整であり、1には系切痕が残っている。器壁

が薄く脆さを感じるが、胎上、焼成は普通である。色調は2が褐色、1は外面が黒褐色、内面が漆黒色を呈する。

杯2類(3・4)側線が略直線状に作られ、底は台が付いたものであるが、それ程顯著ではない。底は3が糸切底、4が糸切後に笠調整が行なわれている。4は極めて粗雑な整形状態を呈している。胎上、焼成は良好で、色調は3が明褐色、4が黒褐色を呈する。

杯3類(5)直線状に開いた杯に高台が付いたものである。胎土は普通で、焼成は須恵質に近い様で色調は白褐色を呈する。

皿(6)口唇部が杯1類に比べ更に外反した器高の低いもので、底部には杯1類同様の笠割りが行なわれており、底は笠調整で仕上げてある。胎土、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。

釜(7)内傾する口縁に略水平な鉢が取付けられ、鉢以下で内傾して底部に至るものと考えられる胴部には幾段の笠張模が見られる。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する

(2) 須恵器

甕(8)底部のみであるが、恐らく壺であると考えられる。胎土、焼成とも良好で、色調は灰色を呈する。

(3) 灰釉陶器

高台付皿(9)高台付皿の口縁部と考えられるもので、口唇部が僅かに外反している。灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布したものである。10は椀か皿の高台であり、やはりどぶづけの手法で灰釉が塗布されている。

(4) 砧 (11) 四面をよく使用した跡が残っている。

(5) 鉄滓 住居址北西隅近くの片面から検出された。

(6) 土製品 (12) 土筋器片を利用したもので、四周が磨かれている。

第2号住居址については、特徴らしきものは看取されなかった。

3 第3、4号住居址内出土遺物

第3及び4号址よりの出土遺物は岡上復元可能な土師器4点、須恵器1点、灰釉陶器1点、灰釉陶器7点の他に、鉄製品、鉄滓であった。

(1) 土師器

土師器とは杯、耳皿、盃が見られる。

杯(第12図13・14)杯の側線が略直線状に形成され底部に至るものである。底部は小さな台をもっているが、それほど顯著ではない。13は整形が難に行なわれている。胎上、焼成は良好で、色調は14が褐色、13は外面が漆黒色、内面が赤褐色を呈する。

耳皿(15)側線が緩やかな彫みをもった皿部に高台が付されたもので、底は糸切底である。皿を作つてから両端を指で押さえ、内側に折り込んだものである。内外面に刷毛目痕が見られる。胎土、焼成とともに良好で色調は褐色を呈する。

盃(16)小形の盃形土器であり、内外面に刷毛目痕が見られ、底は糸切底である。胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

(2) 須恵器

甕(17)把りの部分を欠いているが、口縁部は鳥嘴状を呈する。胎土、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

(3) 緑釉陶器 (18) 植の高台部と考えられるもので、深緑色の緑釉が両面全体に布布されている。胎上、焼成は良好である。

(4) 灰釉陶器

灰釉陶器には高台付碗及び高台付皿の器形が見られる。

高台付碗 (19~22・25) 口唇部が19は僅かに外反、20, 21, 25が大きく外反、22が内反気味をし、口縁部から緩やかに底部に至り、高台を付けたものである。19, 20, 21, 25は灰白色の灰釉が、どぶづけの手法で塗布されているが、22は細片のため不明である。19~21には口縁部に箆で引摺いてできた様な凹部が数個見られる。

高台付皿 (23・24) 23は口唇部が大きく外反、24は内反するやや小形のものである。灰釉は23がどぶづけの手法で塗布されているが、24は不明である。又、26~29は灰釉陶器の高台である。

(5) 鉄製品 (30) 鉄製品であるが、断片であることと、鏽が著しいことにより、何なのか不明である。

(6) 鉄滓 覆土内より1個の出土を見た。

3・4号住居址の特徴は綠釉陶器と、やや多量の灰釉陶器の出土したこと、耳皿や、小形壺が出土したこと、意識的に底部周辺を打ち削った底が多く出土したことがあげられる。

4 第5号住居址内出土遺物

第5号址よりの出土遺物は復元可能な土師器6点、須恵器1点の他に、墨書き器片が見られる。

(1) 土 師 器

器形は杯、皿、甕、鉢などが見られる。

杯 (第13図1・2) 口唇部が僅かに外反し、口縁部より緩やかに内彎しながら底部に至るもので、底部には時計と逆回りに窪割りが行なわれている。底は1が箆調整で仕上げられ、2は糸切後に箆調整がされたもので、一部に糸切痕が残っている。内面には共に花弁状の範磨きが見られる。整形は入念に行なわれ、胎上、焼成も良好で、色調は褐色を呈する。

皿 (3) 口縁部が内反気味で、緩やかに底部に至るもので、底は直起しである。整形、胎土、焼成ともに良好で、色調は黒褐色を呈する。

甕 (4・5) 口縁部が外反し、胴部は緩やかに内彎して底部に至るものと考えられる。4は輪積によって作られたものである。共に外面には縦位の範摺痕が、4の頸部に箆で削り取った痕が見られる他、4の内面にも横位の範張痕が見られる。胎土は共に砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。

鉢 (6) 口縁部が内反し、それ以下では略直線状をなして底部に至るものであり、胴部外面には縦位、内面には横位の範摺痕が見られる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

(2) 須 恵 器

蓋 (7) 把のみである。

(3) 墨書き器片、土師器の杯片に墨書きの見られるものがあったが、判読は不可能である。

特徴的にはこれと書いたものを上げることはできない。

4 C~1グリッド内出土遺物

C~1グリッド内よりの出土遺物は岡面復元可能な土師器2点、灰釉陶器1点である。

(1) 土 剣 器

杯(第13図8・9)口唇部が外反し、口縁部以下は略直線状で底部に至るものである。底は観調整が行なわれているが、ほとんど糸切痕を残している。胎土、焼成とも良好で、色調は8が黒褐色、9が褐色を呈する。

(2) 灰 軸 陶 器

高台付皿(19)高台付皿の口縁であり、灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布されている。

以上、各住居址出土遺物の特徴を記述してきたが、各住居址の中でどのような関連性があるかのいた点をあげてみよう。

第1号址の杯1類と第5号址の杯1類とは同形態で、しかも内外面の笠磨き、挖削りという同じ整形方法で作られており、時期としては同時期のものと考えて差しつかえあるまい。又、第1号址の杯2類及び皿と、第2号址の杯1類と皿とが、第1号址と第2号址の関係の如く同形態、同形態であることから1号址と2号址とは同時期に置かれてよいだろう。このことから、1号址、2号址及び5号址は略同時期の所産であることが考えられる。3・4号址の時期については3・4号址が2号址を切って構築されていることから3・4号址が新しく、1・2・5号址が古い時期のものであることが理解できる。しかし、この2のグループの間にはそれほどの時期的なずれはないものと考えられるが、陶器についてみるとさらに明確にされるのではないだろうか。即ち、緑、灰釉陶器が一つの手懸りとなるであろう。

第1号及び3・4号川七の須恵器杯蓋の口縁部形態は奈良朝以前のものと違って「く」の字形をとり、その時期は凡そ10世紀以降と考えられる。第1号址の須恵器台付杯は台の脚部の形態から猿投山須山須恵器の編年第二期後半から第三期前半に比定され、その年代は10世紀後葉から11世紀中葉にむかれるものであると思う。第1号址の緑釉陶器・高台付碗の時期は、前編年の第三期前半の11世紀中葉以前に比定され、これより1号住居址は10世紀後葉から11世紀初頭に中心が置かれるものと考えられる。第3・4号址出土の灰釉陶器・高台付碗の脚部形態は28が第三期前半の10世紀末葉、19・27・29は第四期(12世紀)に近い形態をとり、26は第3期前半(10世紀末葉)以降に置かれよう。又灰釉陶器ではないが耳皿が出土しているが、猿投山占古窯においては10世紀末葉あたりから見られるのであり、この耳皿も10世紀末葉以降に比定されよう。これより第3・4号址の時期は10世紀末葉から11世紀初頭に中心が置かれるものと考えられる。これからも第1号址の方が、第3・4号址より若干古出の時期であることが窺えよう。

よって、木遺跡の火年代は10世紀後葉から11世紀初頭に置かれるもと占えのではあるまいか。

第1号址の緑釉陶器第10図28は長野県松本市周辺にのみ現在は知られていないといわれているがその產地は日下のところ明らかではない。同じく緑釉陶器(同29)は、愛知県の鳴海古窯、同じく灰釉陶器(同30)は、静岡県小笠郡の清谷古窯、同じく灰釉陶器(同31)は、岐阜県忠節郡の永田古窯でそれぞれ生産されたものと考えられ。第3・4号址の緑釉陶器(第12図18)は、愛知県小牧市・篠岡窯、灰釉陶器(同19)は、岐阜県忠那市の美濃古窯址群で、同じく灰釉陶器(20, 21, 23, 25~29)は、永田古窯で生産されたものと考えられる。

本遺跡出土の陶器は以上のように鳴海古窯、美濃古窯(永田古窯を含む)、篠岡古窯及び清谷古窯に生産されたものと考えられ、鳴海古窯、篠岡古窯及び清谷古窯のものは各1点と、永田古窯製品のそれに比べて極めて少ない。又本遺跡からは、隣接長野県下に濃厚に分布している陰刻花文系

陶器は一片も出さしていない。ただ近接の石和町々営住宅造成地からは四角花文を有する猿投製品の出土が注意されているところから、精密に遺構に伴う出土品の点検をした結果をふまえなければならないが地域の堅穴住居には各々個性があるかも知れない。^④長野県下調査ではその多くが明らかであり参考となる点がすこぶる多い。

本論については直接私共かけ出しの研究者に担当者山本寿一氏を通して手厚いご指導をたまわった名古屋大学の柏崎彰一先生には深く感謝しなくてはならないし専門の多いこの種の調査研究に大きな手がかりを得ることが出来たことを心からお礼申し上げたい。（菊島美夫）

緑釉及び灰釉陶器出土地名表 (山本寿一氏、菊島美夫 1972) (谷口一夫、小林広和)

出土地	出土遺物	備考
1 東八代郡一宮町末木	緑釉陶器、灰釉陶器	上部器、須恵器 木曾告泰殿
2 " 高坂町八下戸	灰釉陶器	上部器、須恵器 表探篠島美夫藏
3 " 石和町大字上平井	緑釉陶器、灰釉陶器	土師器 表探山本寿一氏藏
4 茅崎市清町町	灰釉陶器	茅崎市教育委員会藏
5 富士吉田市駒塚上ノ段	灰釉陶器	富士スバルラン・建設に伴って出土
6 逗留山先通	灰釉陶器	都留市教育委員会藏
7 北口塙郡白州町竹字	灰釉陶器	名詠氏三郎氏藏
8 金崎市藤井町	灰釉陶器	藤井小学校蔵

5 まとめ

以上各項について、遺構、出土遺物の特徴について述べたのであるが、歴史時代における聚落の調査が各地において実施され、多くの成果が報告されている時、ここに標高280~360メートルの扇状地帯特に甲斐国分寺、同尼寺の中間地域の一部の調査の結果がまとまつてあるが、散在している堅穴がとらえられたこと。そして緑釉陶器、墨書き師器、圓分寺瓦、鉄斧などの出土が確められていることは今後の甲斐国分寺守寺周辺調査に手がかりを得たこととなろう。緑釉陶器や字を書くことの必要性は何か発生しているのだろうか。圓分寺瓦や鉄斧がどうして伴出しているのだろうかとする考え方方が普通に存在する民衆そのものとは区別されてよいだろうし、何等かの形で生産にその一部が結びついているのかも知れない。文献とのつながりがつけにくいくこの時期の資料だけにその意義は大きいものがあるわけであり、いろいろな問題を提起していくことであろう。例えば真跡の程は定かではないが、若し1部伝えられるようなこの時期に等しい製鉄址が塩山市内に存在していたとすれば谷木山麓（青森県四津郡鶴ケ沢町大館森山）における製鉄址の炉のような、幅約80センチメートル長さ1メートル、深さ60~70センチメートル、底面20~30センチメートルに木炭や鉄滓を敷き、側壁は鉄滓やスサ入りの粘土でつんでいるようなものが当然あったのであろうし対比が出来よう。その外にも原料やその技術なども当然考えられてこよう。もっとも陶器についてもいろいろと考えられてくる。発掘調査によって得られた緑釉陶器の中には鳴海窯のもの、篠岡窯のもの、窯元不明のものなどがあり、特に鳴海窯のものは、北は多賀城（宮城県多賀城町）にまで見られるようにその経路も当然考えられるであろうし從来、緑釉陶器、灰釉陶器についての分布の実態が不明確な状況の山梨にあって、発掘資料としてとらえられている事実はまことに重要である。

長野、岐阜両県境にある神坂峠の発掘調査に関連して名古屋大学柏崎彰一助教授にご教示を得、山梨県下の、猿投、尾北中津川などの古墳群で焼かれた陶器類の分布を古道に沿って追求してみようとの呼びかけに、ようやく応えられることとなったわけでありその学恩に深謝しなければならない。

そしてさらには、静岡県小笠郡笠原村清谷のものに類似する陶器の分布図にも手がかりを得られることとなつたのである。古窯址についての各地の研究が進み、その生産地の拡大の様相が逐次明らかにされてきている現在、これら地方との流入経路を知ることは、地域社会の歴史的発展の姿をとらえるうえの手がかりが得られようし文献を欠如しているこの時代の空白が一歩一歩はぐされてゆくことにかかせない物的な実証としてその一片一片が貴重な存在となつてくる。

(4) 次に最近明らかとなつてきている群馬県の例のように国分寺と尼寺の中間地域で「東院」と呼ばれる建造物の外、関係ある堅穴が40戸ほど発見されている事実にも照らして、この末木丙ノ木神社周辺の堅穴もあるいはそのようなものの一部にあつてはまるものなのかも知れることである。そして堅穴住居址における例えば、ダブリの法則というようなものがあるものとすれば、それはたしかに4号址が3号址を切って構築されている事実からいいあらわさせるであろうし、併出の遺物によっての差違を一応時期的に考えてみたところである。国分寺域の周辺にかかる事実のあることによってこの地域つまり末木、東原、岡分あるいは石和町、御坂町などはかけがえのない歴史的環境である。

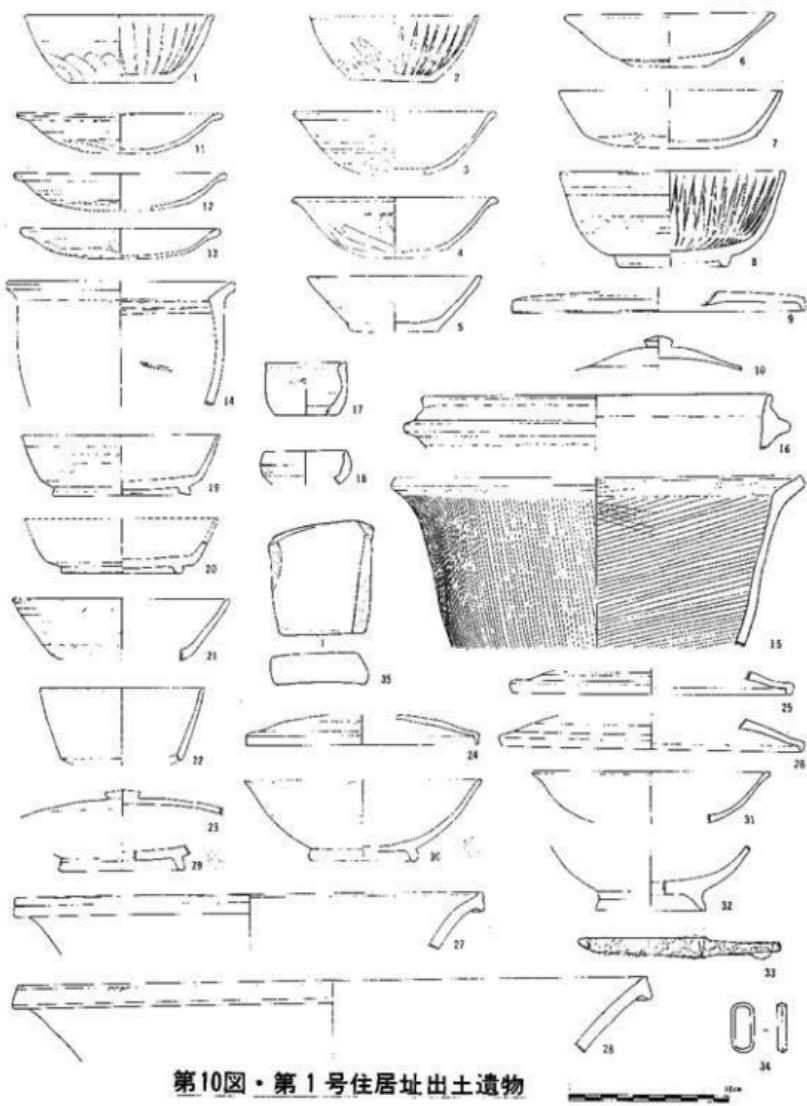
緊急調査が幸い既設道路の一部拡幅であり開発に伴う破壊が現在のところ広がっていないが、すでに前踏でものべているような緊急に面としての保護対策を講ずべき時期でもある。

そしてこれ等の堅穴住居址の時期が10~11世紀にかけてであり、勿論国分寺が機能的に活動しているからこそ、そこに住む堅穴住居の中に瓦も併出したものであろう。このような瓦については、今後この種時期の堅穴住居址の中にどのような形で併てくるかは興味ある問題の一つとしたい。無限にその遺跡が存在するのではないのであって、破壊に伴う緊急調査ではあっても、学問的な必然性をもつものとして今後の調査に立向いたいものである。出土遺物の中で特に愛知縣下や静岡県下の古窯に見られるものと同一なものが今後も発見されることであろうとしたそのような事に特に注目したいし今回の調査にあたり名古屋大学の橋崎彰一氏のあたたかいご教示によるところが大であることを付記しなければならない。そして同氏による古代・中世の陶器史年表をしばらく見つめ、愛知県下の古窯址の分布状況を念頭に入れ古代甲斐國の歴史にうえに何があり、どのようなことが波及してきたのか静かに考えてみたいと思うのである。

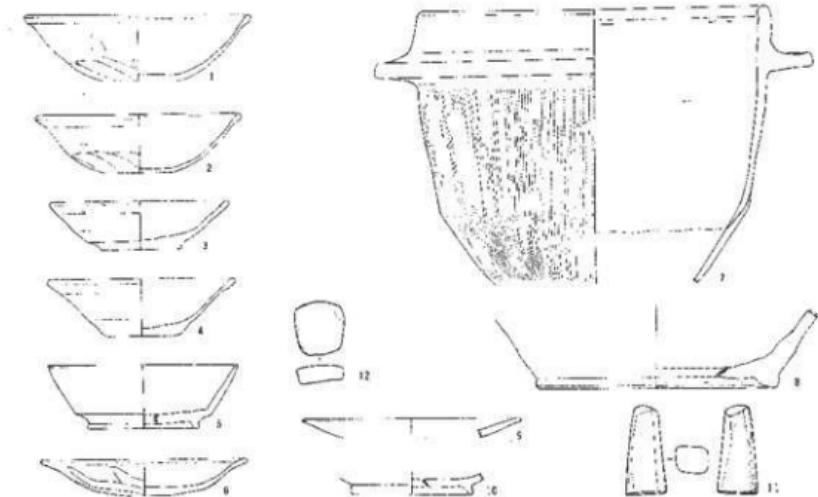
なお今回の成果が聚落と条理遺構、莊園と聚落遺構など御坂町~八代町~石和町を広く含めた地域への解明の手がかりとなれば幸であり、そのことは政府の位置確認など考古学的調査に期待するところが多大であるからである。(山本寿々雄)

参考文献

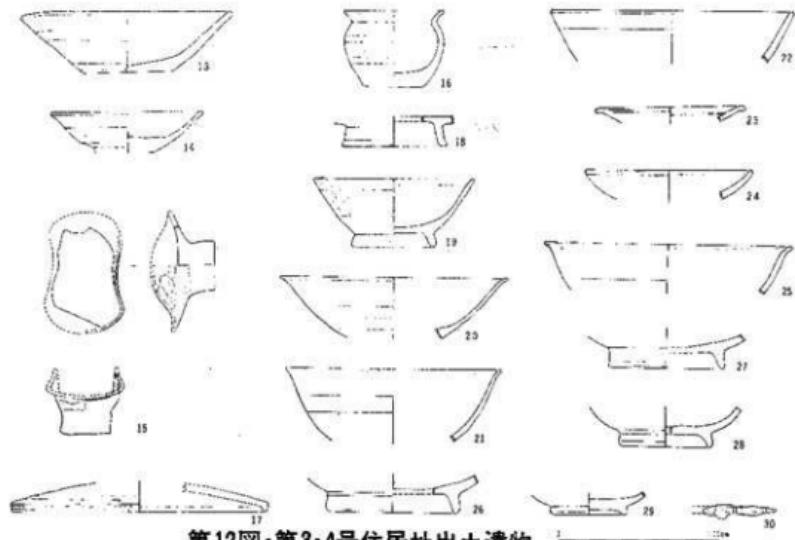
- | | | | |
|------------|-------------------|-----------------------|------|
| ① 大場 簿 健外 | 平 出 | 平出遺跡調査会 | 1955 |
| ② 小出 義治外 | 山梨県日下部中学校校庭聚落遺跡概報 | 上代文化19 | 1959 |
| ③ 山本寿々雄 | 「一宮町」 | 前掲書 | 1970 |
| ④ 橋崎 彰一 | 「土器の道」(1) | 名古屋大学文学部
25周年記念論文集 | 1968 |
| ⑤ 宮城県教育委員会 | 多賀城跡調査報告 (1) | | 1979 |
| ⑥ 松島 栄治 | 群馬県の国分寺遺跡について | 前掲書 | 1971 |



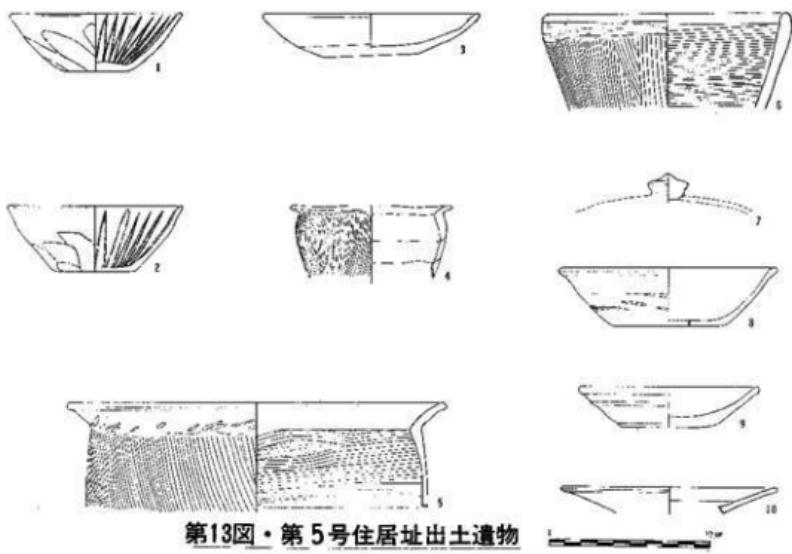
第10図・第1号住居址出土遺物



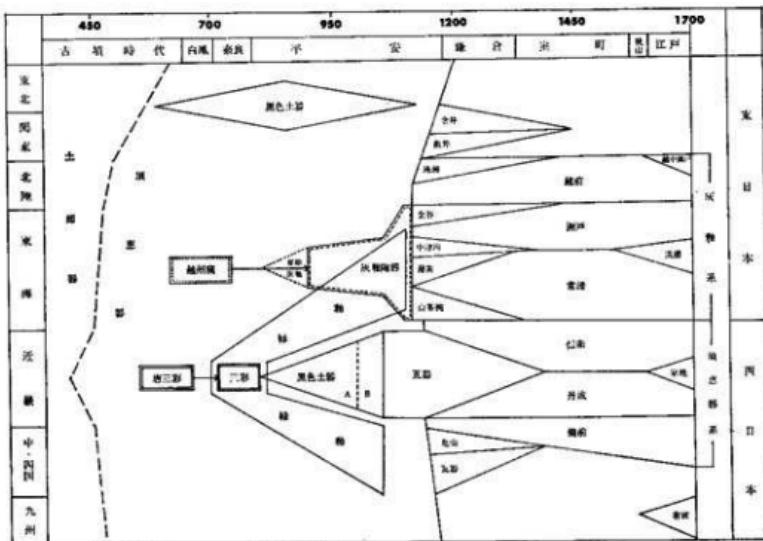
第11図・第2号住居址出土遺物



第12図・第3・4号住居址出土遺物



第13図・第5号住居址出土遺物



発掘担当者

山本寿々雄 谷口一夫

川崎昌宏

同 調査協力者

塙島由吉男 森本圭一

崎崎金大信

同 (立正大学)

小林広和

田中天信

同 (都留文科大学)

菊島美夫 山本正則

竹内清志

同 (明治大学)

里村晃一 田中文江

小林恵子

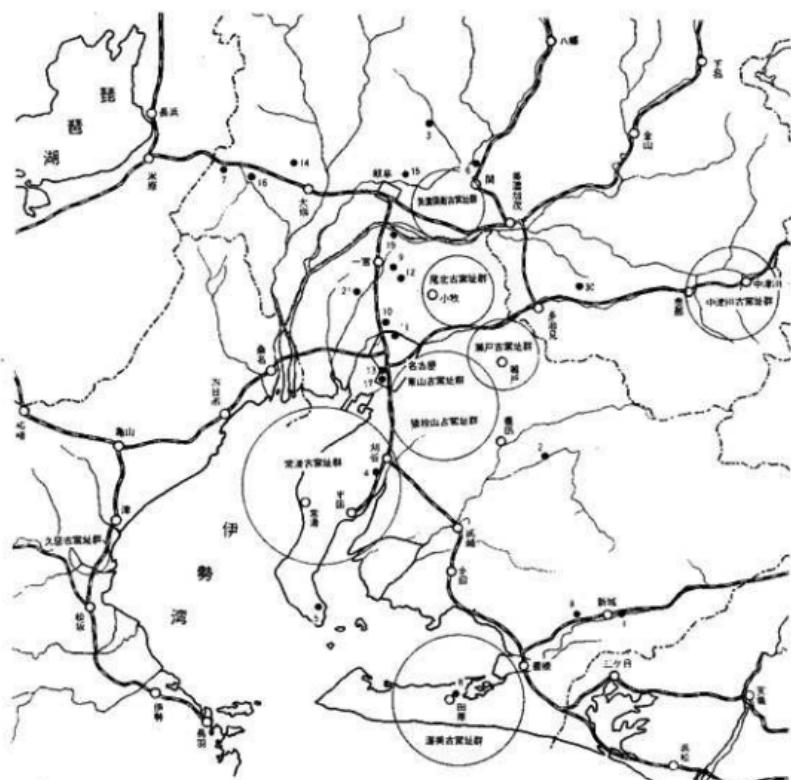
倉鹿野あづ子

服部弘采

(山梨大学) 考古学研究会の一部参加見学

愛知県下における先土器文化～古墳の分布

(名古屋大学文学部考古学研究室)



- | | | | |
|---------|--------------|----------|-----------------|
| ① 萩平遺跡 | S 37発掘 無土器時代 | ⑫ 牧田古墳群 | S 34発掘 古墳後期 |
| ② 酒呑遺跡 | S 41発掘 繩文早期 | ⑬ 高藏古墳群 | S 28発掘 古墳後期 |
| ③ 九合洞窪 | S 25発掘 繩文草創期 | ⑭ 嵐焼古墳群 | S 27発掘 古墳後期 |
| ④ 入海貝塚 | S 23発掘 繩文早期 | ⑮ 浅井古墳群 | S 33発掘 古墳後期 |
| ⑤ 天神山遺跡 | S 30発掘 繩文早期 | ⑯ 久原古窯 | S 38発掘 古墳後期 |
| ⑥ 塚原遺跡 | S 29発掘 繩文中期 | ⑰ 尾張國分寺址 | |
| ⑦ 中野遺跡 | S 37発掘 繩文中期 | ⑱ 美濃須衛古窯 | 奈良
古墳～平安 |
| ⑧ 吉胡貝塚 | S 26発掘 繩文晚期 | ⑲ 尾北古窯 | S 32発掘 古墳～鎌倉 |
| ⑨ 馬見塚遺跡 | 繩文晚期 | ⑳ 東山古窯 | S 32発掘 古墳～鎌倉 |
| ⑩ 貝殻山貝塚 | S 29発掘 弥生前期 | ㉑ 猿投山古窯 | S 30～37発掘 古墳～鎌倉 |
| ⑪ 西志賀貝塚 | S 23発掘 弥生前期 | ㉒ 潟戸古墳 | S 37発掘 平安～現代 |
| ⑫ 大地遺跡 | S 26発掘 弥生中期 | ㉓ 勝常滑古窯 | S 31～37発掘 平安～現代 |
| ⑬ 高藏貝塚 | S 26発掘 弥生後期 | ㉔ 深美古窯 | S 40～41発掘 平安～鎌倉 |
| ⑭ 遊塚古墳 | S 36発掘 古墳前期 | ㉕ 中津川古窯 | S 33発掘 平安～室町 |
| ⑮ 龍門寺古墳 | S 36発掘 古墳前期 | ㉖ 元星牧古窯 | S 33発掘 桃山 |

第1図版



1号住居址全景



1号住居址瓦及びカメ出土状況

第2図版

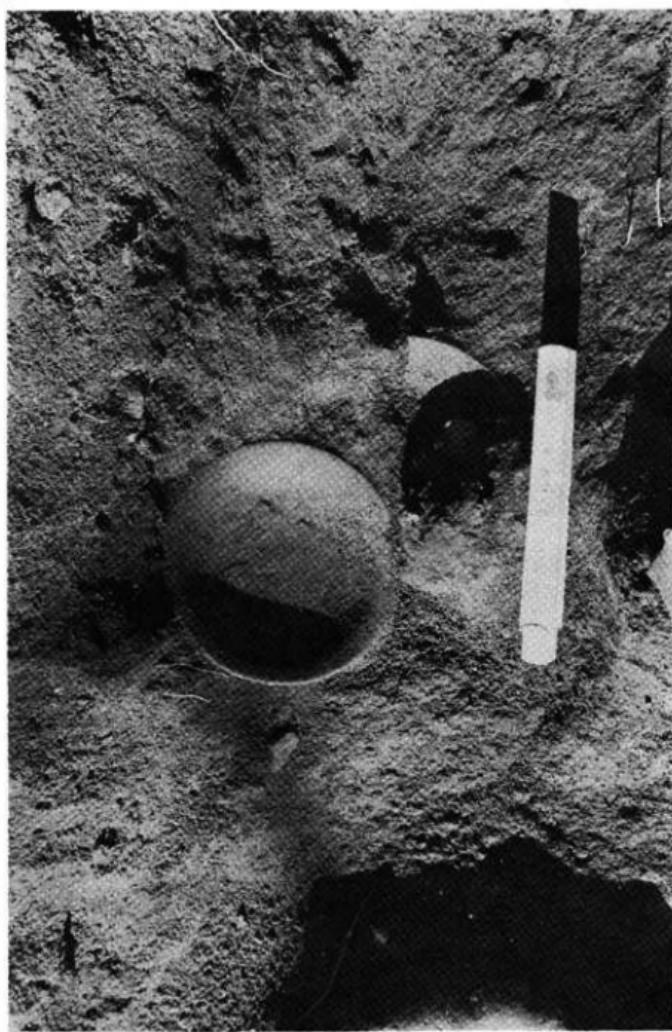


1号住居址 刀子出土状況



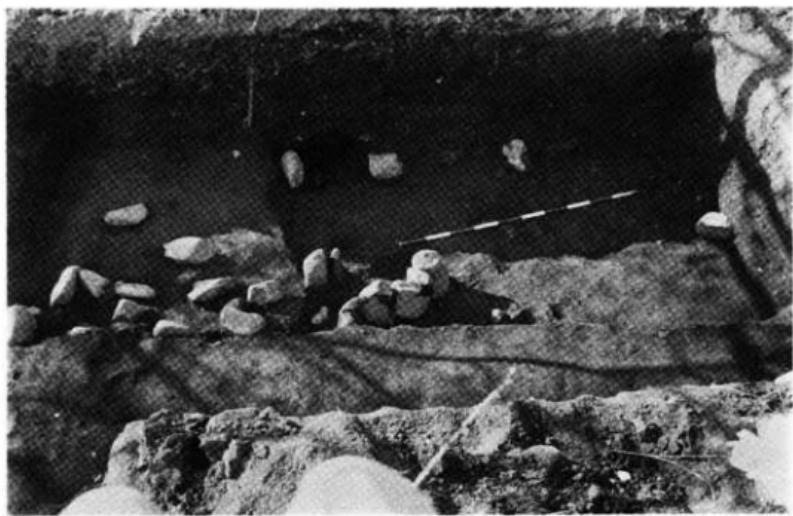
2号住居址 全景

第3図版

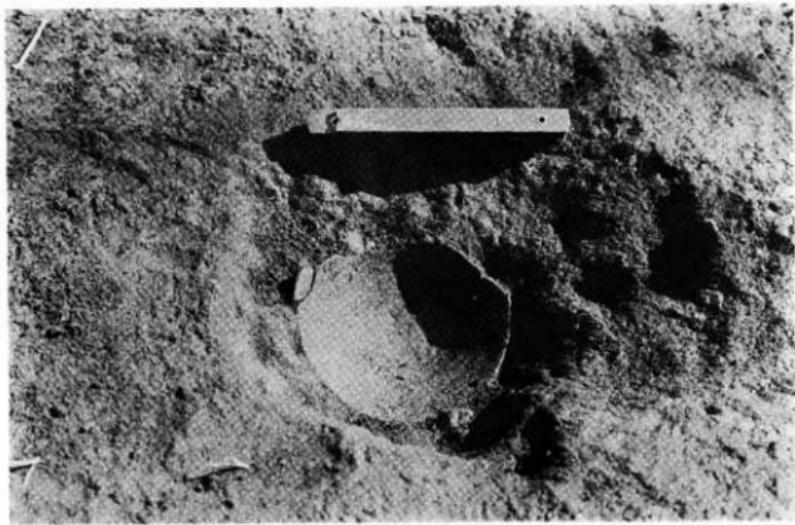


2号住居址 鉄滓及び皿出土状況

第4圖版



3+4号住居址全景

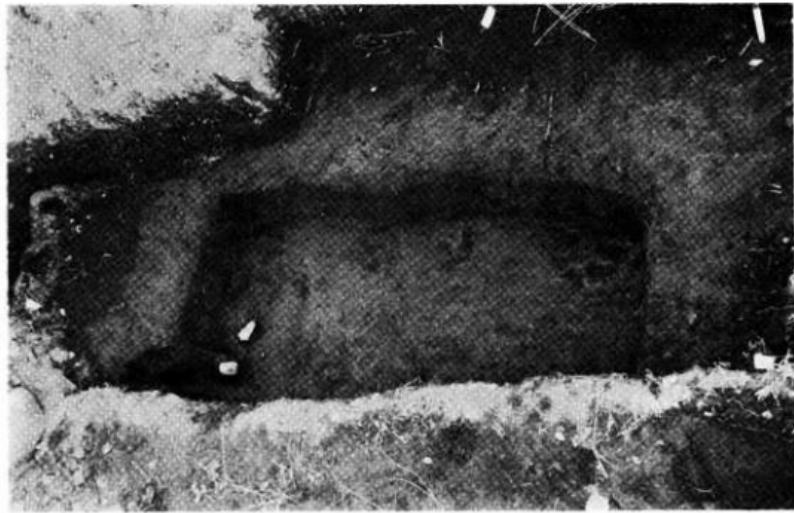


3号住居址出土状况

第5図版



耳皿出土状況



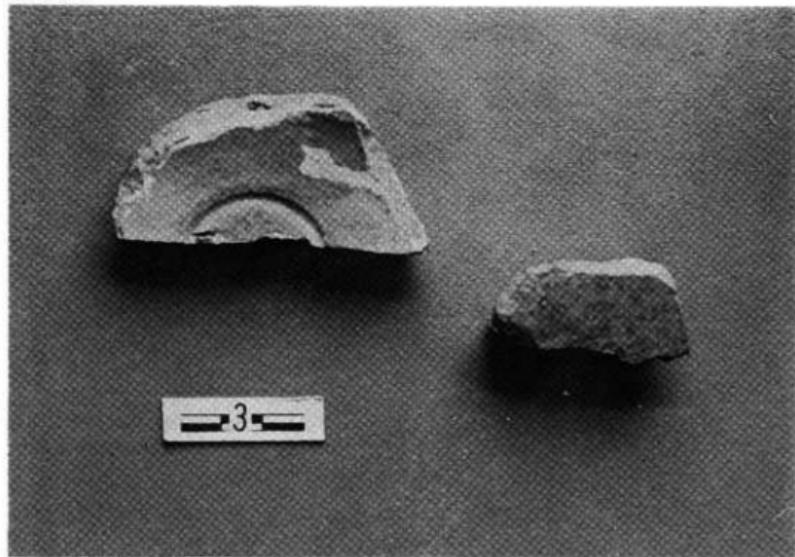
5号住居地全景

第6図版



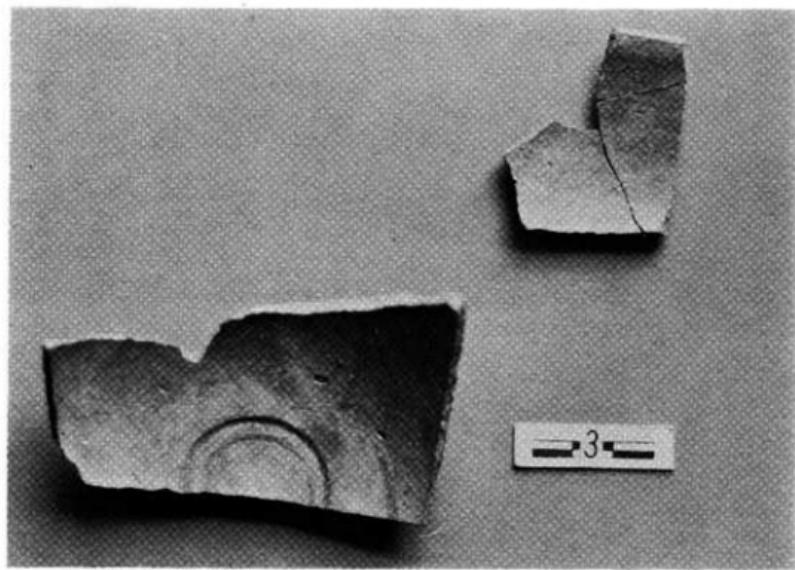
5号住居址 皿及びカメ出土状況

第7圖版



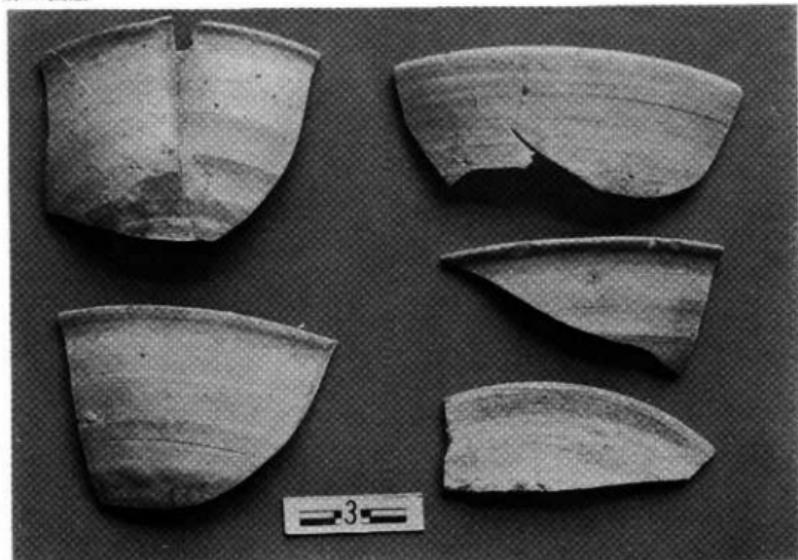
左 1号住居址出土绿釉陶器

右 3号 “ ”

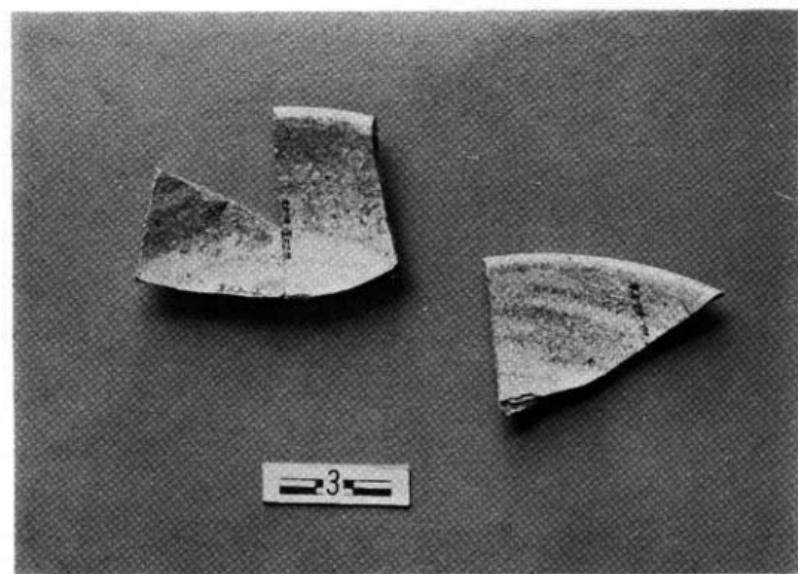


1号住居址出土绿釉陶器

第8圖版



3・4号住居址出土灰釉陶器

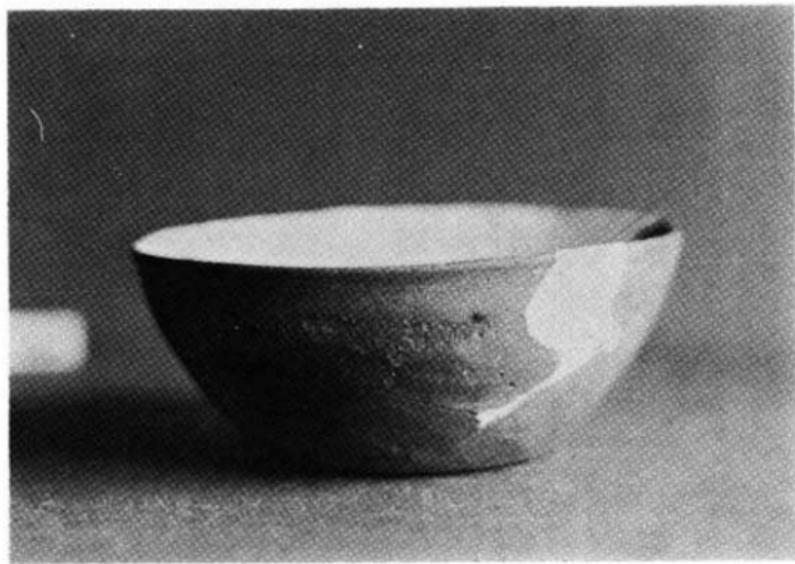


1号住居址出土灰釉陶器

第9図版

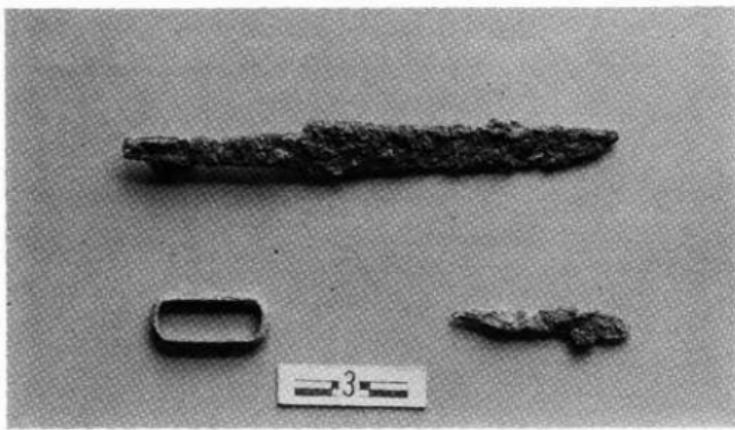
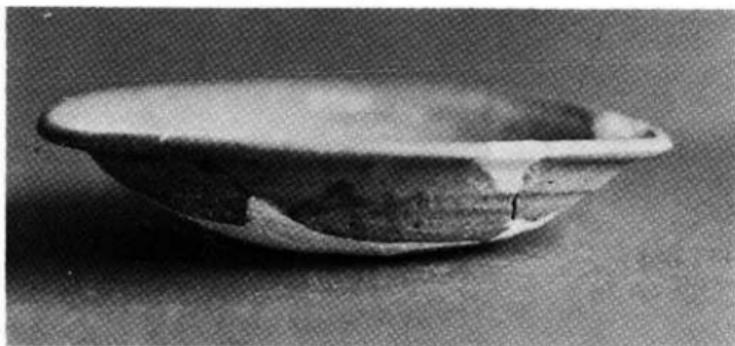
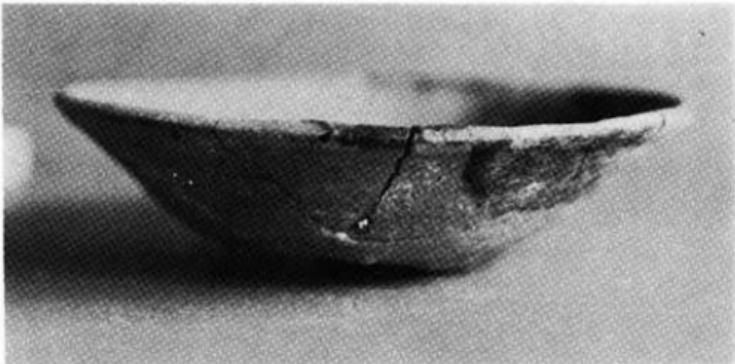


1号住居址出土土師器



1号住居址出土土師器

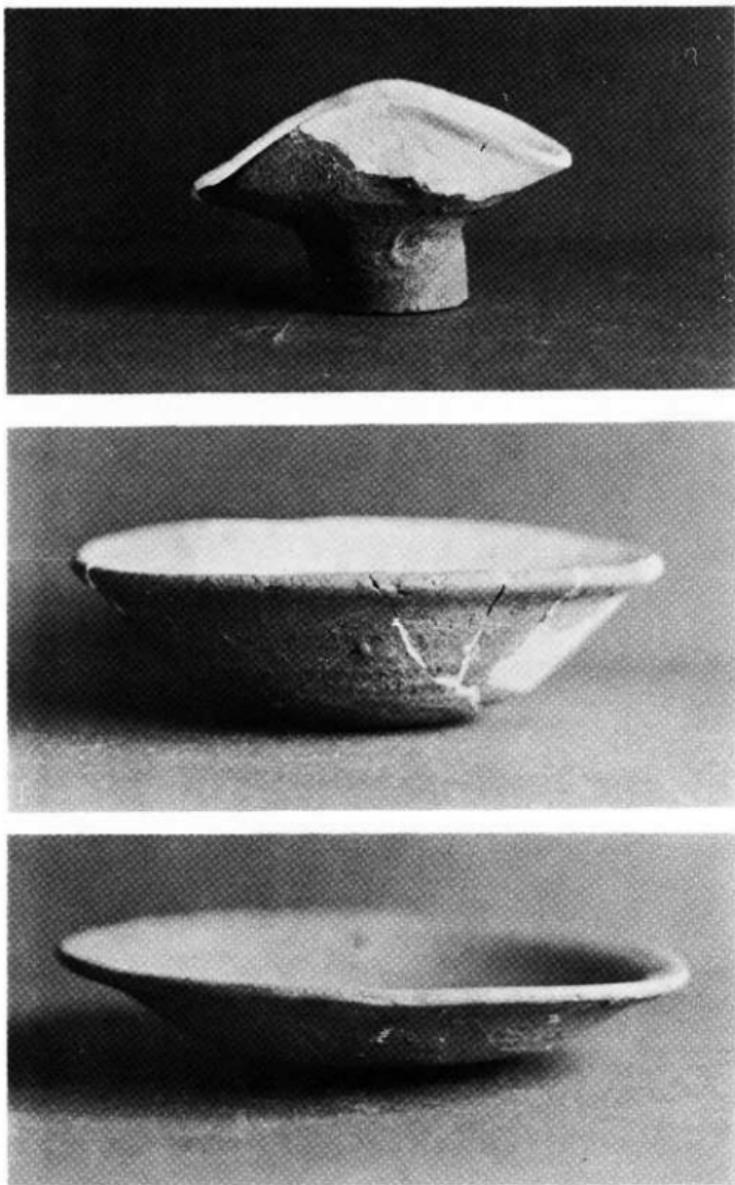
第10圖版



上 1号住居址出土土器（炭化物付着）

中 1号住居址出土土器

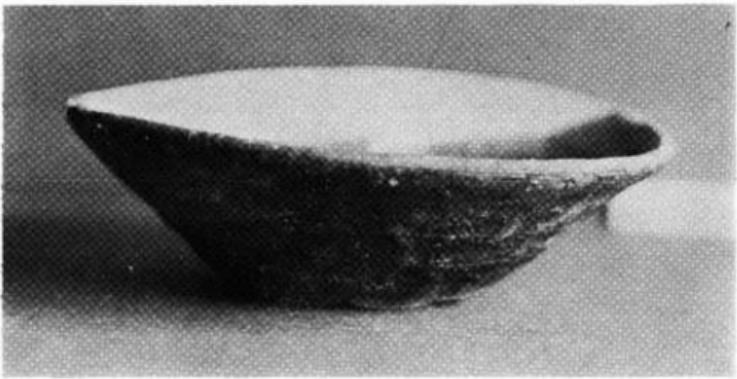
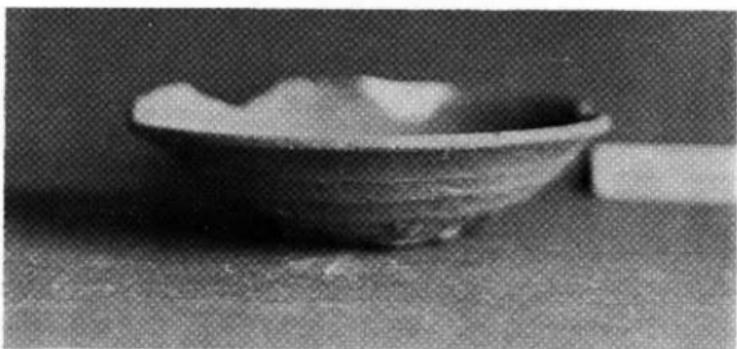
下 刀子，刀裝具，鐵器片



上 3, 4号址出土土器

中 2号址出土 "

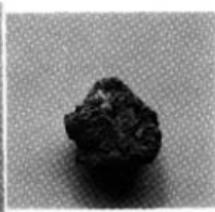
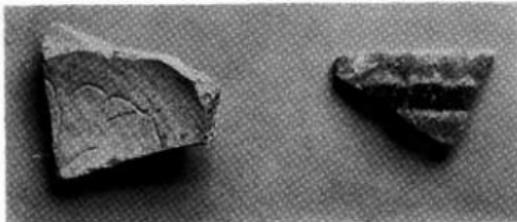
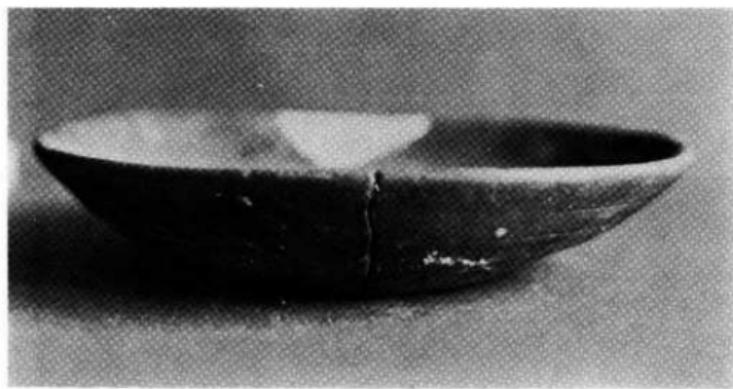
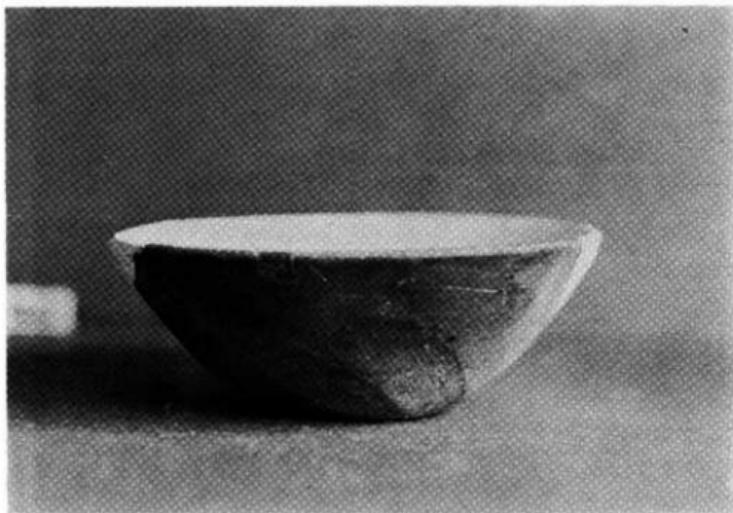
下 " "



上 3,4号住居址出土土師器

中

下



上 5号住居址出土土師器

中

下 石和町営住宅付近出土の縁輪陶器及び灰釉陶器及び3号住居址出土の鉄滓

